

基地撤去をめざす 県央共闘

* ↑タイトル・題字募集中

NO. 4

2008.9.17

発行：原子力空母の母港化に反対し

基地のない神奈川をめざす県央共闘会議

〒242-0028 大和市桜森 3-5-3 7号1F

事務局連絡先T:042-752-4544 F:753-4725

E-mail:wm5h-urn@asahi-net.or.jp

編集責任者 檜鼻達実

来るなXP-1 防衛省は約束を守れ！



横須賀市民、神奈川県民の不安がぬぐいされないまま、原子力空母ジョージワシントンが9月25日、横須賀に入港しようとしている。タバコの不始末で大火災事故を起こし、修理に3ヶ月を要した。通常型と違い、推進エネルギーは原子炉なのだ。地震国の日本。何が起こるか分からないなかで、横須賀を母港化しようとしている在日米海軍司令部。キティホークが離日して、静かになった大和の空に再び爆音を撒き散らして奴らがやってくる。アフガン、イラクに浴びたましい血を流し続けた奴ら。

P3C 哨戒機の後継機である XP-1 は、天候悪化のため1日順延し、9月5日、厚木基地にその機体を横付けした。大木大和市長は、試験飛行であることを理由に乗り入れを認めている。

XP-1 は P3C より一回り大きく、また、ジェットエンジンであることから、違法爆音に苦しみ、静かな空を求めて、基地撤去に取り組んでいる厚木爆同、第四次訴訟団はあらたな騒音被害が発生するとして、反対を表明してきた。

1971年、自衛隊機について、ジェット機は基地に乗り入れないとする大和市への通知文書があることから、約束を無視する防衛省のやり方に怒りが充満しているのだ。

この日、午後3時、「XP-1 来るな」「46文書を守れ」とプラカードを掲げ、基地北側で抗議行動を起した。しかし、日米軍事再編の只中であって、何でもありでゴリ押しする防衛省の軍事行動を黙ってはいは、さらなる基地強化に結びつくことは自明のこと、NOを叫ぼう！



**止めよう原子力空母／違法爆音は許さない 大和行动
…9/21.22(座り込み).23(怒りの監視活動)…**

今こそ爆音を止める！母港化返上！ストップ米軍再編！！

8.30 公開討論 in 大和



8月30日、雨模様でぐずった天気。土曜日の午後ということもあり、勤労福祉会館前の道路は大渋滞。駅からは便利だが、今後は考えものだ。

さて、修理のため入港が遅れている原子力空母ジョージワシントンが9月25日に横須賀に入ることが公表されている。また、キャンプ座間では、第一軍団前方司令部の増強が図られている。反対の立場で国に対して、基地の恒久化解消を求めている星野座間市長も、協議機関設置を以って、姿勢を転換してしまった。相模補給廠内には、ハンビーが車列をつくってプールされている。厚木基地でも爆音問題の解消は程遠い状況にある。

一連の日米軍事再編によって、神奈川の米軍基地は様変わりしようとしている。ストップ原子力空母の母港化、基地の機能強化を阻止しようと取り組んできた人たち、県央共闘会議構成団体のメンバーに発言者になっていただき、これまでとこれからについて討論していただくとう企画された8.30公開討論 in 大和。

主催者として大波代表は、「戦争は政治が息詰まった時、武力で意思を通そうとする勢力によって引き起こされる。米軍基地があることで、市民生活に弊害が及んでいるが、集団的自衛権によって、日本が戦争に直接的に参加していくことになる。そんなことは許されない。私たちは、反戦・反基地の闘いをしている。本日は、皆さんで現状について討論し、学びあうことで運動の組織強化につながっていくことを望んでいる。」とあいさつ。矢野亮さん（厚木基地を考える会）の軽妙な司会で公開討論は始まった。

厚木基地爆音防止期成同盟の若頭である岡本聖哉大和市議は、組織が抱える課題として、指導層の高齢化に直面している。若い人たちに、どう運動の継承をしていくかが問われている。艦載機の岩国移転が示されているが、自衛隊機とのバーターであり、負担軽減は考えられないと述べる。

次いで、横須賀で運動をしている**新倉裕史さん（非核市民宣言運動ヨコスカ）**は、ベトナム戦争世代。しかし、声をあげるきっかけは、空母ミッドウエーの横須賀母港化であった。毎月1回月例デモをしている。8月31日で391回目になる。振り返ってみて、軍港として百年以上栄えてきた横須賀という街であるからこそ、反戦の火は必要であったし、市民もそれを認知した。平和船団を持つこともできた。軍都であったことを教訓にした港湾法は、自治体権限によって軍事基地の強化を規制することができるが、横須賀市は、原子力空母専用の接岸施設を認めてしまった。少数で運動を続けている。最近、月例デモの参加者は30～40人に膨れている。しかし、仲間が亡くなっていくことがショックだと語る。

自分の言葉で伝えていく

次いで、キャンプ座間の正門で毎週水曜日午後、座り込みをしている**原順子さん（バスストップから基地ストップの会）**は、行動に至った経緯について、米軍再編の中間報告を知って、日本は売られたな。意志表示しないまま、先の戦争のように被害者面したくない。また、そんな思いの人が仲間に数人いた。何をしようかと思いついていた時、バス停に座り込むことには、警察が介入してこないことがわかった。そのことが行動につながり、デモなんかしたことがなかったが、周りの人に聞いて方法を教わり、続けてきている。自分の思っていたことをやっていくこと、その努力が大切と思っている。これまで、誰かに任せていたことで既成事実がつくられた。自分の言葉で伝えていくことが大事だと語る。

同じく生活拠点で声をあげている**大和市議の河崎民子さん（大和の空を考える市民ネットワーク）**は、市民の方が政治参加していくことを基本的なポリシーとしている神奈川ネットワーク運動に属している。市民が政策形成過程に参加していく。そのなかで、大和に住むことがなければ基地問題や戦争について、考えることがなかっただろう。母親の子どもを戦場に立たせたくないというのが原点になって活動している。戦争

に加担している戦闘機が、自分たちの空で訓練している。また、若者の間に拡大している貧困問題が不安要因と思っている。社会のセーフティネットが崩れ、今、非正規雇用が増えている。社会保障基盤のない貧困層が固定化することと戦争が結びつかないか不安だと語る。

次いで、30年、基地監視活動をしている**沢田政司さん（相模補給廠監視団）**は、「目の上のたんこぶ、のどぼとけにささったトゲ」と題して、月刊軍縮原稿を書いた。戦車闘争の時（1972年）は20歳。育ちは東京でした。戦車闘争は画期的なことと評価している。闘争が終息し、30数団体がその後の基地の動静を監視することから活動が生まれた。補給廠の基地機能が小さくなっていくことで、参加する団体が脱けていった。仲間が少ない悩みはある。デモや集会を主催することはないが、相模原のなかで市民権があるのは、基地の動きを写真・資料を添えて、記者会見するとメディアが取り上げてくれるようになった。発信するメッセージとして、監視活動があると語った。

司会の矢野さんから、これまでの闘いから、これからをどのように組していくか、そのためには何を為すべきかの問いかけに、各発言者は応えた。

岡本さんは、7000人を越える原告と言っても、爆音区域には約150万人の住民が居住している。声を上げない人が多数である。訴訟に勝利しても、基地の閉鎖はないだろう。声なき声の組織化、つまり生活者としての運動を創り出していく努力が必要。騒音被害でもあるが、軍事基地でもあり、イラク戦争に加担していること、それを支えている思いやり予算は税金なのだ。本当は、知らないでは済まされない。問題意識として、説得力をもつ運動が必要だ。

原さんは、辺野古への新基地建設を名護市長が受け入れた時、市長権限の重さを知った。だから、座間市長を応援してきた。これからは考えた時、イラク派兵違憲訴訟で“平和的生存権”として、違法判決が名古屋高裁であった。運動のキーワードとしてこだわっていききたいし、何々系に捉われず統一してやれたならばと思っている。

敗北しながらも前に進んでいる

新倉さんは、統一と団結を否定はしないが、各々に経緯と多様性があり、尊重されてもいい。各々に地域性があり、かつ、選択性もある。決めつける必要はないと思う。これまでの運動の積み重ねで、敗北しながらも前に進んでいることを実感している。住民投票条

例制定請求運動での市民アンケートや、横須賀市が行なっている3年に一度の市民アンケートの結果を分析してみると、運動の手掛りはある。軍都であることの壁は厚い。しかし、市民意識は変わっていると思うと述べた。

河崎さんは、厚木基地から艦載機が、岩国基地に移駐するのは困難と考える。少数でも出来る運動として、行政不服審査法、情報公開条例等、司法による攻め口を考えていきたいと述べる。

運動の積み重ねが状況を変える

沢田さんは、基地があることで、さまざまな被害がある。こうした実態を丹念に拾っていききたい。補給廠にも必ず戦闘指揮訓練センターは建設されるであろう。これまでの運動経験から思うことは、劇的に何かが変わることはないのでは。横須賀の運動もそうだが、さまざまな運動の積み重ねが何かのきっかけなり、状況変化があつて、転換点になるのではないかと思っている。沢田さんの話は、流した汗がきつといつか報われる日がくるとの筋立て。30年の苦労が読み取れる。

司会の矢野さんから、運動の広がりについてどうしていくかの問いかけに

岡本さんは、議会と市民の声は一体ではない。基地は迷惑施設。生活者としての視点で、これから取り組もうとしていることに、「爆音カレンダー」を配布して、記入にってもらうことを考えていると話す。

新倉さんは、戸別配布しても、知らない、読まない人がいる。そのことを考えると、やり足りないことはある。今、「原子力空母は本当に安全か？」のパンフ（part2）を1万枚作成している。

原さんは、どうしてそんなに資金があるの？とうらやましがる。これからメール等を使って、ネットワークをより広げたいと意気込みを語る。

沢田さんは、少数の方が小回りがきく場合もある。監視団活動を続けていくなかで、手掛りをつかんでいきたいと述べた。

司会より、予定していた時間がきてしまった。最後まで熱心に参加していただいたことに感謝し、また、発言者の皆さんに意見交流出来たことにお礼を述べて、本集會が閉じられた。

（本稿は、檜鼻メモによりまとめたものであることをお断りしておきます。また、現場で格闘しながらも、運動を一步でも広げ、地域課題として争点化しようとすることに、あらためて敬意を表明したい。ご協力ありがとうございました。）



違法爆音許さず、基地のない日本をめざして一米軍基地や自衛隊基地による騒音問題に苦しむ住民が、相次いで飛行差止めや損害賠償を求めて裁判闘争を起している。こうした基地爆音で訴訟している原告団の代表者らが9月6日、大和市で交流集会を開催した。

沖縄県内から新嘉手納基地爆音訴訟団、普天間米軍基地から爆音をなくす訴訟団。石川県から小松基地爆音訴訟連絡会。東京から横田基地飛行差止め訴訟団と公害対策を進める準備会。山口県から岩国基地爆音訴訟準備会らが参加した。

厚木爆音訴訟より一年早く提訴した小松基地爆音訴訟、厚木基地と横田基地は、1976年に提訴。各訴訟団の闘いは数年を要し、各々が第一次、第二次と積み重ねてきているが、「飛行差止め」

を求めることは、いずれも棄却されている。3つのテーマで分科会がもたれたが、米国の言いなりになる日本政府の姿勢と、司法判断を逃げる裁判のあり方そのものが問題点として浮かび上がる。思いやり予算が投入されて進められている米軍再編など、原告団は、この先、何年先続くのかと憤りを隠せない。岩国への支援、連絡会の設立など、今後の活動方針が確認され、交流集会は閉会した。

当 面 の 行 動 予 定

- 9月19日(金) 午後6時30分 **ストップ原子力空母 やめろ違法爆音 基地強化を許さない神奈川集会(大通り公園)**
- 9月20日(土)～24日(水) 原子力空母の横須賀母港化に反対する座り込み行動(ヴェルニー公園)
- 9月24日(水) 午後2時00分 ↑座り込み行動の集中日(ヴェルニー公園)
- 9月21日(日)～23日(火) **違法爆音の恒久化に反対する座り込み・怒りの監視活動(詳細別途)**
- 9月25日(木) 早朝/入港時間 **入港時の阻止行動(うみかぜ公園・横須賀中央駅下車15分)**
- 9月25日(木) 午後6時30分 **原子力空母の横須賀入港に抗議する全国集会(ヴェルニー公園)**
- 9月26日(金) **沖縄と神奈川を結ぶ交流活動(安次富共同代表) 相模原 AM9:30～ 大和 11時～ 座間 PM14～16 緊急集会 PM6:30～県民センター1501号**
- 10月 1日(水) 午後7時00分 **拡大事務局会議(訴訟団事務所)**